

新聞に興味を持ち そこから視野を広げる教育の試み

芦屋市立山手小学校 校長 中村 整七
教諭 森 一弘

本校は、芦屋市の山手に位置し、地元の人々が昔から居住している伝統ある地域である。従って、保護者の協力や理解が得られやすく、また、家庭的には裕福な環境であるといえる子どもが多く住む地域である。

このような地域的な背景のもと、子どもたちに新聞に興味を持たせ、そこから視野を広げるための実践を試みたいと考えた。本稿では、6年生の子どもたちを対象にした実践を報告する。

小学生が新聞というメディアに対してどのような意識を持っているのか、また、どのくらいの子どもたちが日々新聞と接しているのか、そして、新聞をどのように活用しているのか、子どもの実態を見ながら取り組んでいった。

実態を通して、見えてきたことを基に、次の三つの視点を設定し実践を行ってきた。

☆子どもたちに新聞へ興味を持たせるための活動とは、どのようなものがあるのか。

☆子どもたちが新聞から学び取ることは可能であろうか。

☆子どもたちが新聞を活用し自分の生き方に取り入れることが可能であろうか。

このような三視点を設定し、実践を行った。その取り組みの実際を報告する。

1. 子どもたちに新聞に興味を持たせるための活動とは、どのようなものがあるのか

(1) 子どもの主体的な活動にする！

9月から新聞が配達されることになり、子どもたちと新聞の置き場について話し合いを持った。これは、子どもたち自身が決めることで、新聞への興味を広げることにつながると考えたからである。

話し合いの結果、全校生が読める場所として図書室へ置くことになった。また、係を決め、図書室に設置した新聞ラックに朝刊を整理することになった。

図書室で読み終えた新聞はクラスに持ち帰り、新聞社ごと、日付ごとに整理し、朝の読書タイム、休み時間など自由に読める環境をつくった。

いつでも身近に新聞を手にとることができ、整理整頓を行うのは子どもたちという環境づくりを行うことで、子どもたちが新聞を手に取り読む姿が見られた。興味を持ち始めた子どもたちであると考えられる。

(2) 朝の読書タイムを利用する！

本校では、毎日朝の会の始まる前 10 分間（8 時 30 分から 8 時 40 分）を読書タイムとして子どもたちの興味ある本を自由に読んだり、PTA の協力で保護者による「読み聞かせ」の活動があったりする。今回、NIE 推進協議会より新聞の提供を受けたことで、子どもたちと話し合い朝の会の時間に新聞を各自で読むことにした。子どもたちは時間が来ると各自で新聞を取り、興味ある記事を読み、新聞から自分なりに感じたことを心にとどめるようになった。

(3) 日番が朝の会で、新聞の記事から興味を持ったことを素材にスピーチをする！

10 月に入り子どもたちから、朝の会でのスピーチの内容に新聞の記事の話題が多くなってきた。これまでは、学校であった事、家での出来事などを素材にスピーチを行っていた子どもたちであったが、自然発生的に新聞の記事を素材にスピーチを始めたのである。このことは、私にとっても興味深い出来事であった。新聞を読むという環境が、誰かに話をしたいという状況を生み出したのである。

ただ、私自身、朝の会的话题をあえて新聞の記事の内容を選び、子どもたちに話をしてきた。もしかすると、このような教師の日々の取り組みが子どもたちに影響をしたのかもしれない。

2. 子どもたちが新聞から学び取ることは可能だろうか

(1) 興味ある記事へ自分の感想を書き、壁新聞にまとめる！

【新聞記者派遣事業からの発展】



【子どもたちがまとめた壁新聞】

子どもたちに、新聞へより興味を持たすため、班ごとに新聞を読み、班員全員が興味のある記事を選び、その記事を書いた記者の思いを読み取っていく活動を行った。

この取り組みは、NIEの活動である「記者派遣事業」から、子どもたちは影響を受けたものである。話を伺った記者の方から、「それぞれの記事には、取材した記者の思いや願いが入り、読者に伝えたいことがある」という思いを知った。このことを利用し、子どもたちに班単位で、興味ある記事を選ばせ、その記事に対して、記者の思いを推察し、自分の言葉でまとめさせた。

この取り組みは、話し合いのよる合意形成、興味ある記事の選択に意味を持たせた。

子どもにとって取り組みやすいのは、個人で興味あることを見つけさせ、まとめていく活動であろう。しかし、これでは個人の活動に終始し、個人でスクラップをしていくという取り組みと同じであり、集団で学び合う学校で行う必要はないと考えた。

班員4人で話し合いながら、興味ある記事を探し、それぞれが自分の考えを出し合うことで、記事の読み方、事象の見方に深まりが出てくると考えたのである。(批判的思考の発揮)

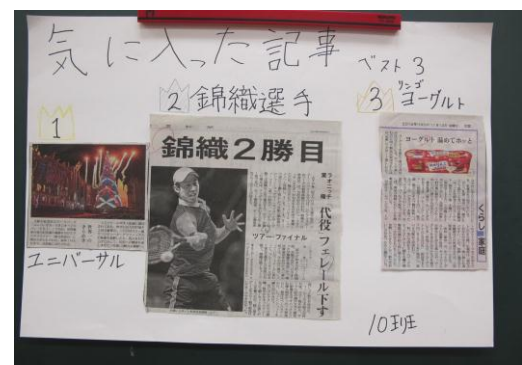
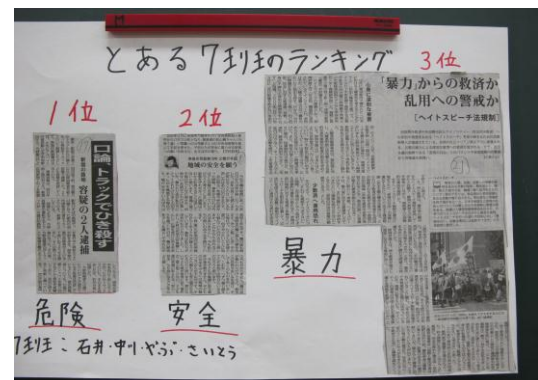
この取り組みの様子を見ていると、子どもたちが興味を示す記事の多くは、将来につながる記事であ

り、自分たちが将来出会うことになる内容に興味を持っていたのが特徴的であった。

例えば、「リニアモーターカー」「ヒト型ロボット」の記事を取り上げ、記者の人が、未来の社会の様子を読者に想像するように促しているように感じるなどの感想を持つことができた。

このことから、新聞を読むことによって、未来の社会の様子が、子どもたちなりに想像でき、それに対応できる態度や知識が自然と育成されることにつながるといえる。

(2) お気に入りの記事にランキングをつける！



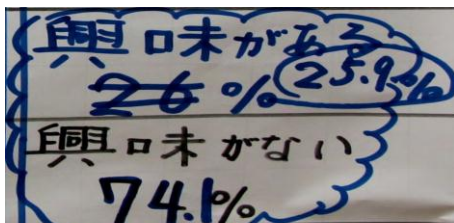
【お気に入りの記事ランキング】

この取り組みは、まずは各人でお気に入りの記事を見つけ出し、その記事がなぜ自分にとってお気に

入りなのかを班員に語り、集まった記事の中から班で3位までのランキングを付ける取り組みである。左にある写真のように子どもたちの興味は幅広く、沖縄の基地問題、スポーツ選手の活躍、人間同士のトラブル事件、テーマパークについてなどが1位となった。

ランキング付けにより、子どもたちは、より興味のある記事はないかという思いが強まり、新聞の端から端まで読み込んでいこうとする意識が高まり、知らなかった事実や考え方を新聞から学び取っていく姿が見られた。

お気に入りの記事を見つけ出す取り組みの中で、朝刊1日分には幾つの記事があり、その記事に興味があるかという調査を実施した。結果は写真にあるように、興味ある記事は朝刊全体の25.9%、興味がない74.1%となった。



【新聞記事への関心度の割合】

興味がない74.1%となった。この調査の中で、新聞の記事について本学級のクラスの子どもたちは、次のような感想を持っていた。

「理解できない内容があったり、言葉が難しかったり、漢字が読めなかったりした」

「自分たちの生活にあまり関係ないような気がした」

「新聞を家で読む時間がない」

「新聞はテレビよりも詳しく情報が書かれているが、テレビの方が映像などで理解しやすい」

このような新聞に対する事実や感想を子どもたちは持っていた。新聞記事から新しい知識を得たり、その記事の分野に興味を持ったりすることができる。半面、小学生にとって新聞記事の7割以上が難しいと感じる事実が明らかになった。

そこで、子どもたちに無理に新聞を読ませることではなく、日常的に新聞を手にする環境作りが、まず必要であり、その環境の中で子ども自身が、興味ある記事を見つけ出していくことに面白さを感じ取らせる取り組みが学校教育の中で可能であること

が明らかになったといえる。

3. 子どもたちが新聞を活用し自分の生き方に取り入れることが可能であろうか

新聞の記事への7割以上に対し、興味がない子どもたちの現実から、少しでも興味を持たせる取り組みがないかと考えた。最後に、その取り組みを紹介する。

(1) 琴線に触れる言葉探しをする！

まず、私自身が新聞を何のために購読しているのかを考えてみた。

- *世の中の、政治・経済・流通・商業・科学などの今を知りたい。
 - *スポーツの結果やその経緯を知りたい。
 - *テレビ番組の情報を知りたい。
 - *琴線に触れる言葉を探したい。
- などが主な理由である。

この中で、子どもたちに体験をしてほしいと考えたのは、最後にある、一人一人の琴線に触れる言葉探しである。新聞記事の中から、自分の心に引っ掛かる言葉を探すことで、新聞記事に興味を示すことにつながると考えた。その記事の内容を理解して、初めて言葉の意味を知ることになり、同時にその記事を書いた記者の思い、記事に登場する人物や内容への共感につながると考えたのである。

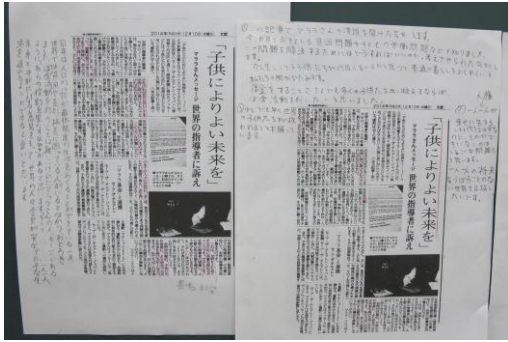


【お気に入りの言葉】

子どもには「お気に入りの言葉」として、ワークシートにまとめた。この中で、女兒は「女性進出」という言葉を挙げ、その理由に「女性に権利がなかったときは、時代が変わった」と記した。

言葉	理由
女性の進出	女性に色々な権利がなかったときは、変わった位と思いたった
アヒルカゲ 幹部を殺害	気に入らなくて、気に入らなくなった、最近イスラエルパレスチナは何かがあったと聞きましたから
アヒルカゲ 前庭	これ気に入らなくて、気に入らなくなった、冷戦など何かがあったかと思いたった
怒り争奪戦 VS 怒り争奪戦	青色LEDを説明した3人の記事が、自分の身近な事でも言われて、驚かして、去年の事かと思いたった
子ども	日本は少子化の国、先進国にはあるものがない、でも、いろいろな子どもの教育は大事なことだと思いたった
気合、執念	気合だけでなくスポーツでもかかっている人はいないかと思いたった
語りつづける	戦争の時に生きていた人はもういなくなっていて、若い人が戦争を語りつづけることが大事だと思いたった

新聞の記事から自分の生き方に関して興味を持たせるために、ノーベル平和賞を受賞したマララさんを取り上げた記事から「今、私ができること」を考えさせた。出てきた意見は、大きく分けて2点に集約できた。一つは、「世界の子どもたちの状況を知る」こと。



【マララさんを取り上げた記事から】

もう一つは、「調べたことを発信し、募金活動などの行動を起こす」ことであった。この活動は、教師による授業化が必要であることは言うまでもない。

4. まとめ

今回、兵庫県NIE推進協議会の協力のもと、子どもたちへ新聞というメディアに興味を持たせ、自分たちの生き方につなげていく試みを実践した。取り組みで判明したことは、次の通りである。

☆ 新聞を子どもたちがいつでも手に取る環境が必要である。

各家庭では、新聞を購読していない環境が多くなっている。この場合、ネットでニュースを見ているという実態があった。公教育の中で新聞を活用するための予算不足、若手教員の活字離れなどの課題も目の前にある。

教育の一環として、新聞が学校現場に配達され、いつでも見られる環境整備を模索していく必要がある。

☆ 子どもに無理をさせず、興味ある記事を見つけさせることが必要である。

子どもは記事の7割以上に興味がないと思っている。このような状況を把握し、発達段階に応じ無理なく、子どもの興味を最大限に生かしていく取り組みを行うことが必要である。教師

の思いが強くなり過ぎると子どもの思いとずれが生じる可能性が高く、記事をリライトするなどの教材化も必要である。

このことと同時に、子どもたちの主体的な取り組みにしていく必要も大事な要因である。

☆ 子どもたちに新聞に興味を持たせるには、教師が授業化していく必要がある。

このことは、当然といえば当然である。環境の整備により、自然発生的に興味を持つ可能性があることは今回の取り組みで明らかになった。しかし、自然発生だけでは、子どもの思考の深まりを育成できない。

教師自身が琴線に触れる、子どもにとって価値ある記事を基にして、教材化・授業化を仕込む必要がある。記事選びの視点として、

- ・子どもにとって身近。
- ・子どもが自分たちで調べたり、活動ができそう。
- ・集団で考えることで内容が深まる。(すぐに答えが出たり、答えが一つではない素材)

このような記事を素材にするとよいのではないかと今回の実践から考えることができた。

若手教員の活字離れ、新聞離れが危惧させるが、各学校での地道な実践が、子どもたちが自分たちで課題を持ち、その解決に向けて行動していくことにつながる最短距離だと感じた。

☆ 最も必要なことは子どもによる主体的な取り組みを保障することである。

教師の一方的な指導は、子どもたちに思考を停止させる場合がある。常に子どもの思いを受け取りながら、主役である子どもを前面にした取り組みを行いたいものである。